

KADENA SKOSHI

MARCH & APRIL 2010

Vol. 18 & 19



第18航空団広報局発行



2010年 おきなわマラソン

第18航空団広報局

第18回おきなわマラソンが3月7日に開催され、今年も嘉手納基地では多数のボランティアが協力活動に参加しました。嘉手納基地内のコースは沖縄市空港通り側の第2ゲートから北谷町山内側へ続く第5ゲートの約2.8キロで、基地内ボランティアにより、コース沿道に5箇所の応援団テントが設置されました。およそ250人の基地内ボランティアが、ランナーに給水をしたり、声援を送ったりとランナーたちを励ましていました。基地内の車両に対する道路封鎖、ゲートの開閉など、憲兵中隊から約60名の隊員が出動し数千人のランナーが安全に基地内を走りぬけることができるよう、安全確保に留意しました。基地内では最初の走者が入る2時間前からコース沿いの道路の車両通行止めを実施しています。

今年の沖縄マラソン大会には、米軍関係者及び外国人約250人を含む9,342人がフルマラソンに出場しました。そのうち7,770人余のランナーが嘉手納基地内コースを走りぬけました。

(写真全て、米空軍：レイ・ラモン一等軍曹撮影)



目次

PART I

- おきなわマラソン
- 日米エアフォース友好協会
- 嘉手納基地研修視察
- 表彰式
- 嘉手納基地の航空運用について

SpotLIGHT

嘉手納基地で働く様々な職種の日本人従業員にスポットをあてて毎月紹介して行くコーナーです。意外な発見があるかも...必見です！

嘉手納町立外語塾卒業式



2010 OKINAWA MARATHON



日米エアフォース友好協会・賛助会員、嘉手納基地を研修視察

日米エアフォース友好協会（Japan-America Air Force Goodwill Association- 通称JAAGA）の賛助会員及び同協会理事36名の方々が2月18、19日、嘉手納基地へ研修視察を行いました。18日には基地内の将校クラブで夕食会が行われ、第18航空団と航空自衛隊那覇基地の幹部、そしてJAAGA沖縄支部役員も出席しました。また夕食会では、地元沖縄より空手道拳龍同士会で活躍する小中学生による空手演示も披露されました。JAAGA研修参加者は、基地内の宿泊施設で滞在し、19日は朝食後、第18航空団司令部にて同航空団の概況説明を受け、航空団の所属航空機（F-15戦闘機、KC-135空中給油機、HH-60救難ヘリ）を見学しました。研修参加者は、各航空機パイロットからの概要を受けながら、それぞれの航空機について熱心に質問し説明を受けていました。研修参加者の丸紅工アロースペース株式会社に勤務する佐々木氏は「今回の研修を通して様々な米軍機をより理解することができました。日米条約によって私達が米国と貿易関係を結ぶるということを実感しました」と感想を述べました。JAAGA理事として研修調整を担当された、新井洋一氏（元航空自衛隊空将補）は「JAAGA賛助会員の方々も皆、嘉手納基地の実情を具に研修出来、極めて短時間ではありましたが、実に中身の濃い研修でした」と話されました。

* JAAGAは航空自衛隊と米空軍の相互理解及び友好親善の増進のため航空自衛隊のOB等で組織されている団体です。

■ 日米エアフォース友好協会、空軍曹長を表彰

2010年2月5日、日米エアフォース友好協会（JAAGA）は、米国空軍そして航空自衛隊の2国間の相互理解や友好親善を推進し活躍した隊員に対し、表彰を行いました。表彰式は自衛隊を支援する地域団体の代表者も出席されるなか航空自衛隊那覇基地で行われ、米空軍からは嘉手納基地第18装備品整備中隊に所属するデニス・オグレイディ曹長に賞状と盾が授与されました。オグレイディ曹長は第18航空団において航空自衛隊との連絡調整官を務め、航空自衛隊員の嘉手納基地研修を企画、実行し、隊員同士の交流活動の調整に尽力したことを評価され今回の受賞となりました。オグレイディ曹長は受賞のあいさつで、「第18航空団と航空自衛隊の調整官として私は双方の関係をより強く構築するため努めてきました。今回の受賞をとても光栄に思います」と述べました。航空自衛隊からは、那覇救難隊の熊坂弘樹一等空曹が表彰されました。熊坂一曹は、英会話も滑らかで、嘉手納基地の救難隊員との職務としての連携はもとより、隊員同士の親睦を深めるよう努めているとのことでした。表彰式に出席した第18航空団司令官ケネス・ウィルズバック准将は「今年は日米安全保障条約改定50周年を記念する年です。日米同盟の基礎となるこの条約は地域の平和と安定の礎であり、二国間のプロフェッショナルな連帯と個人レベルの交流によってこの同盟は強く結びついているのです。万が一、有事などが発生した時は、日米双方の隊員同士が連携をとり、日本国防衛のためにこの協力関係が発揮されるでしょう」と祝辞を述べました。



(写真提供：航空自衛隊)

去った2月、嘉手納基地への外来機の飛来が航空機騒音を増加させているということで地元地域から苦情が寄せられました。任務として航空機運用を実施しながら、同時に地元に対する航空機騒音の軽減に努める航空団の見解を以下に記します。



(米空軍：レイ・ラモン一等軍曹撮影)

"The 18th Wing is well aware of the concerns raised by the local community. However, our mission to provide for the common defense of Japan and to contribute to peace and security in the region hinges on our ability to accomplish vigorous, realistic training in a variety of settings. This includes hosting visiting aircraft and enabling them to operate from Kadena. As a forward staging base and a power projection platform, this is a part of our core mission and always has been."

On a daily basis, the 18th Wing makes every effort possible to reduce the impact of our operations on the local community while still being able to carry out our operational mission. For example, in response to concerns about early morning departures of F-15s, Kadena has successfully executed departures during normal flying hours several times over the last year when in the past, early morning departures would have been required. We will continue our efforts to avoid early morning departures whenever operationally possible and will continue to explore ways to lessen the impact of our operations on the local community."

(仮訳) 地元住民から提起される騒音に関する懸念に関して、第18航空団は深く認識しています。同時に、私たちの任務である日本国との共同防衛と地域の平和と安全に寄与することは、様々な想定のもと精力的かつ現実的な訓練を達成する私たちの能力にかかっています。これには外来機を受け入れ、嘉手納より運用させることも含みます。嘉手納基地が前方展開基地、航空力戦力基盤であることは、私たちの任務の中核であり、また常にそうでありました。

第18航空団は、日々、運用活動から派生する地元への影響を軽減するためにあらゆる努力を払っていないがら、その一方で任務の運用を実行しています。例として、F-15機の早朝離陸への懸念に対して、以前には早朝離陸を必要とされていた出発を、昨年数回にわたり通常の飛行時間帯に離陸飛行ができるよう努力し、その結果をみています。これからも運用上可能な限り、早朝離陸を避けるよう私たちの努力を継続し、運用による地元への影響を軽減できる方法を模索し続ける所存です。

